言葉・習慣から日中の文化的相違を考える[1)]

唐　　楽　寧
東アジア研究班委嘱研究員
聖泉大学人間学部教授

1．序言

日本では中国語教育を導入している高校が2007年現在800校以上に達していると言われている。また、大学では中国語の履修者数がすでに第２外国語のトップに躍り出た。一方、アメリカでは2007年現在、初等教育を含めた約2400校が中国語教育を実施している。WBS[2)] によると、米国は中国語教育のための予算が年間３兆6000億円にのぼり、しかも国防予算より拠出されているとのことである。米国の中国語教育に対する戦略的な取り組みに驚く人も少なくないであろう。中国の発展が世界中に注目されるなかで、中国語を学ぶ人も確実に増えている。

こうした変化は教育現場でも感じられる。私は１回目の授業では決まって受講生に中国語を選択した理由を聞くことにしている。「中国の経済はこれからさらに発展するので、中国語への需要が今後高まるだろう」と将来を見据えた学生もいれば、「漢字があるから、なんとなくわかるような気がする」など学びやすさに着目する学生もいるようである。確かに教科書のタイトルを見ても「楽しい」「楽楽」「すぐに使える」「覚えやすい」などの修飾語を冠した教科書は少なくない。これまで使ってきた漢字という身近さから中国語を選択した学生は意外と多い。

本稿は、語学学習の体験や身近な事例を通して日中の文化的相違についてまとめたものである。

2．漢字は意外に難しい

日本人学習者にとって、中国語は漢字があるから学びやすい言語なのであろうか。何回目か

1）本稿は2008年５月21日に開催された、経済・政治研究所第180回公開講座「言葉・習慣から日中の文化的相違を考える」の記録の一部を加筆・修正したものである。
2）WBS：テレビ東京系列の番組、「ワールドビジネスサテライト」である。

の授業で再び学生に感想を聞くと、「中国語の発音は難しい」とか「上がり下がり（四声）がうまくできない」などの声が多く聞かれ、やはり当初のイメージとは違って「漢字」に苦戦している学生が多いようである。似たようなことが、中国の人が日本語を学ぶ場合にも言える。「日本語には漢字があるから、なんとなく意味が分かる」との声が中国の人々からも多く聞こえる。日中双方の言語には漢字という共通の部分があるので、両国の人々は互いに相手の国の言葉が比較的に学び「やすい」言語だと感じていることは否めない。実際に、日本語のまったく知らない中国人に日本語の文章を見せてその意味を確認すると、大筋の意味が漢字に頼って分かるのである。また、安易に考えている人たちを目当てにして中国では１週間の日本語上達コースの募集広告を目にしたことがある。

ところが、中国の日本語学習者から、こんな声も聞こえる。「笑着进去，哭着出来」である。直訳すると、「笑顔で入門し、泣き顔で退場する」という意味で、つまり、「入門は易しく、習得は難しい」である。助詞の使い方が難しいとか、促音が難しいとか、いろいろと挙げられるが、漢字の本家の人々にとって日本語の漢字は意外に難しい。まず、これについて触れてみたい。

(1) 日本語の「漢字」の発音が難しい。

中国語の場合は、基本的に１字１音である。例えば、私の苗字である「唐」は「táng」としか読まない。勿論、例外もある。例えば、「银行（háng）・行（xíng）走」「乐（yuè）器・快乐（lè）」「重（zhòng）量・重（chóng）复」などである。しかし、中国語の漢字の数から見ればそのような漢字は少ない。したがって、漢字の数は多いが、基本的な発音を覚えさえすれば、その後の勉強ははかどる。しかしながら、日本語の場合は、そうはいかない。「畑」「辻」「峠」などごく少数の漢字を除けば、漢字には一般的に「音読み」と「訓読み」があり、しかも幾つもの音読みがあるのはむしろ普通である。これに頭を抱えた中国の人が多いのではないか。例えば、

中国語の場合、「神」の発音は、「shén」だけである。日本語の発音は、神（かみ）様、神（じん）社、精神（しん）、神（かん）田、神（か）奈川、神（み）酒など。一体、発音が幾つあるのであろうか。

では、もう一例を見てみよう。中国語の場合、普通「上」[3] と「下」を「shàng」と「xià」で発音するが、日本語の発音はどうであろうか。

「上」：うえ、上着、上水道、上流、上半期、……

「下」：した、下着、下水道、下流、下半期、……

上記の例から分かるように、「うえ⇔した」、ところが「うわ着⇔した着」である。また「じょう水道⇔げ水道」を覚えても、「じょう流⇔か流」に対応できない。さらに「かみ半期⇔しも

3)「上」について、第三声の場合（上声「shǎnshēng」）と軽声の場合（早上「zǎoshang」）もある。

半期」という読み方がある。これは大学院時代の話であるが、教科書に「上意下達」という表現があり、日本人の大学院生がそれを「上意げ達」と読み間違ったことに驚いたこともある。日本人にしても「じょう」か「げ」かに迷うのではないか。そもそも、母国語を覚えるのは、音で記憶していることが多く、実際に会話ではあまり使わないような言葉に遭遇すると、このようなことが起こるのであろう。

また、外国語を学習する際、新しい単語をいかに効率よく覚えるかが重要であり、そのため、発音の規則（ルール）が分かれば助かる。ところで、日本語の場合、漢字の発音が多いから、規則（ルール）というものを見つけるのに苦労する。

例えば、「物」の発音を見てみよう。通常、「もの」、「もつ」、「ぶつ」と発音する。どんな時に「もの」、あるいは「もつ」、または、「ぶつ」と発音するか、分かりにくい。「もの」と発音する場合、前の漢字も訓読みである。しかし、「もつ」「ぶつ」と発音する場合、前の文字はほとんど音読みであるが、なかには訓読みが見られるケースもある。一体「もつ」と「ぶつ」をどのように使い分けるのか、いろいろと例を集めたが、規則はよくわからない。

例：「もの」「もつ」「ぶつ」

□＋物（もの）	□＋物（もつ）	□＋物（ぶつ）
買物（かい　もの）	進物（しん　もつ）	動物（どう　ぶつ）
貢物（みつぎもの）	穀物（こく　もつ）	現物（げん　ぶつ）
敷物（しき　もの）	作物（さく　もつ）	博物（はく　ぶつ）
大物（おお　もの）	荷物（に(訓)もつ）	植物（しょくぶつ）
魔物（ま　もの）	書物（しょ　もつ）	長物（ちょうぶつ）
偽物（にせ　もの）	禁物（きん　もつ）	異物（い　ぶつ）
売物（うり　もの）	貨物（か　もつ）	乾物（かん　ぶつ）
獲物（え　もの）	食物（しょくもつ）	大仏（だい　ぶつ）
金物（かな　もの）		人物（じん　ぶつ）
着物（き　もの）		汚物（お　ぶつ）
小物（こ　もの）		怪物（かい　ぶつ）
先物（さき　もの）		風物（ふう　ぶつ）
吸物（すい　もの）		事物（じ　ぶつ）
唐物（から　もの）		時物（じ　ぶつ）
和物（わ　もの）		地物（じ　ぶつ）
干物（ひ　もの）		器物（き　ぶつ）

勿論、音読みは中国から伝来した発音であり、伝わってきた年代とか地域によって発音が微妙に違っている。このように考えると、古代中国語の発音を知るうえで、「音読み」が生きている「化石」とも言える。

(2) 人名・地名の「漢字」が難しい。

中国では名刺を受け取った場合、難しい漢字の場合を除けば、普通に読める。ところが、日本では人名・地名について、日本人でさえ正確に読めないことが多い。例えば、苗字の場合、このような例がよく見られる。

上村（かみむら／うえむら）、東（ひがし／あずま）、馬場（ばば／ばんば）、河野（こうの／かわの）、高谷（たかや／たかたに）、角田（かくた／すみだ／つのだ）など例にいとまがない。

また、同じ漢字でも地名に使われる場合と人名に使われる場合、読み方が違うこともある。

例えば、　人名：河原（かわはら）　⇔　地名：河原（かわら）

羽田（はだ）　⇔　羽田（はねだ）

富山（とみやま）　⇔　富山（とやま）など。

ちなみに、私はときどき通訳を担当するが、日本人の名前の読み方に非常に苦労している。名札が付いている場合、漢字は一目で分かるので困らないが、そうでない場合には漢字を特定することができず訳せないのである。

例えば、「私はいわもとです。どうぞ、よろしくお願いします。」を通訳する時、

非常に簡単に思われるが、「岩元」なのか「岩本」なのか、発音だけでは分からないので、その場で確認するしかない。そもそも「元」と「本」の中国語の発音が違うので、漢字の特定ができないと発音もできないからである。同様な例を挙げると、「安井・安居」、「井上・猪上」、「土井・土居」などがある。

中国語の場合は、上記のような問題がまったく起こらないでもない。苗字の場合、例えば、Zhāng「张」・「章」、Xiè「谢」・「解」などのように同じ発音である。しかし、確率が格段に低いと言える。さて、苗字といえば、中国では１字の名字が圧倒的多い。２字の苗字と言えば、诸葛、司马、欧阳、上官などがよく見られる。名前は、普通は１字か２字である。男子の場合、英、俊、福、康、健、强、刚、成、邦など力強さ、勇気、幸運を表す文字が多く使われている。女子の場合、丽、芳、萍、梅、慧、惠、美、翠、娟、花、雪など優しさ、美しさ、しなやかさを連想する文字が好まれる。一方、「越男」、「亚男」のような名前もあり、文字通りに「男を越える」「男に次ぐ」と考えられ、親はどんな思いを込めて名付けたかが分かるような気がする。

現在、中国で最も多い名前（同姓同名）の上位５位（「新民網」情報）は、以下のとおりである。人口の多い順で並べると、张伟（29万0607人）、王伟（28万1568人）、王芳（26万8268人）、李伟（26万0980人）、王秀英（24万6737人）。また、新聞記事によると、同姓同名を避けるため、次のような名前がこれから増えると報じている。それは、「お父さんの姓＋お母さんの姓＋自分の名前」の配列で、組み合わせの可能性が多くなる。中国でも同姓同名の問題に頭を抱えていることが分かる。

日本では、「俊彦」、「博之」、「英樹」など漢字の意味を重視する名前は中国人でもその意味

が理解できる。一方、特に女性の名前で「麻里」、「麻央」などの発音重視の場合も最近よく見られ、漢字の意味を容易に理解することはできない。また、日本では親の名前から１字を子が共有する場合があるが、中国ではむしろ兄弟姉妹の間に１字を共有することが多い。

言うまでもなく、漢字は単なる発音記号ではなく意味もある。昔、新聞に載った記事であるが、中国で「野尻メガネ」の看板を出した日本人の店があって、論争に発展したことがある。争点は「尻」という字が大衆の目に付く看板の文字として適当かどうかということである。

また、中国人の名前を日本語の音読みで発音すると、以下のようなことが起こり、「えっ」と思われる場合もある。

【例】中国の発音では

尤冬青（Yóu Dōng Qīng）→日本語の読みでyu tou sei（連想する文字）→　優等生

马　佳（Mǎ Jiā）→日本語の読みでba ka（連想する文字）→　馬　鹿

同様に日本の地名・人名にも中国の人が見て驚きを隠せない場合がある。恐らく一番理解できないのは「我孫子」であろう。中国ではこの３文字は「罵り」の言葉として使われる場合があるからである。

(3) 日本語では漢字の読み方が変われば、言葉の意味やイメージも変わる。

例えば、立食「りっしょく／たちぐい」、市場「しじょう／いちば」、工場「こうじょう／こうば」、草原「そうげん／くさはら」など読み方を変えることで言葉の意味やイメージも変わる。興味深いことである。

３．日本語の助詞の使い方は難しい

漢字と肩を並べるほど日本語の難しいところは、助詞の使い方であろう。

例えば、a 「山（に）登る」⇔「山道（を）登る」

b 「木（に）登る」⇔「階段（を）登る」

同じ「登る」なのに、山の場合は「に（対象）」、山道の場合は「を（経路）」は難しい。

また、　c 「声を出して読んでください。」

d 「声に出して読んでください。」

「言葉は頭ではなく、体で覚えるものだ」と主張する私は、普段「声を出して読んでください」と特に発音練習に力を入れてきた。しかし、ある日、NHKの語学ラジオ番組で、「声に出して読んでください」と聞き、「を」を「に」に換えることによって、助詞による文のニュアンスの違いに興味を抱くようになった。

ところで、そんな大切な助詞の使い方について、筆者はこんな経験がある。200名以上の日本人の現役高校生や大学生に、下記e～kの文中に含まれている「を」の使い方について文法

上の違いの説明を求めたことがある。

e　ご飯　を　食べる　（他動詞「食べる」の前に置き、その対象を示す）

f　山道　を　登る　（自動詞「登る」 の前に置き、経路を示す）

j　電車　を　降りる　（自動詞「降りる」の前に置き、起点を示す）

k　空　を　飛ぶ　（自動詞「飛ぶ」 の前に置き、場所・範囲を示す）

意外なことにほとんどの日本人学生は、うまく答えることができなかった。逆に留学生の大半は、括弧内のような説明をすることができた。何気なく母国語を使っている人達と外国語を勉強している人達の学習上の違いを改めて認識させられた。

4．外来語について

(1) 日本語の外来語

日本はかつて西洋文化を積極的に取り入れ、それを漢字で表した。その一部は漢字の母国の中国へ「輸出」したそうである。例えば、「公園」、「図書館」、「芸術」などである。現在は外来語を漢字に置き換える習慣はほとんどなくなり、主にカタカナ言葉で味も素っ気もなく、単なる発音記号に化けてしまった。

(2) 中国語の外来語

a　発音に基づく「音訳」

発音を重視し、当て字を選択する。例えば、麦当劳（マクドナルド）、肯特基（ケンタッキー）などよく知られている。格力高（グリコ）、西科姆（セコム）などがその類である。

b　意味に基づく「意訳」

発音より意味を重視し当て字を選択する。例えば、全家（ファミリマート）などである。

c　音訳と意訳の混合　例えば、星巴克（スターバックス）。

d　発音と意味の両側面を配慮しつつ、当て字を選択する。

例えば、可口可乐（kě kǒu kě lè）→「美味しくて楽しい」＋発音→（コカコーラ）

迷你裙（mí nǐ qún）→「あなたを迷わせるスカート」＋発音→（ミニスカート）

などのように、発音からも意味からも配慮した訳語である。日本の会社名と言えば、三得利（サントリー）などがある。

ところで、日本でも海外でも人気の高い「ドラえもん」は、昔は「机器猫（機器猫）」 と訳されていたが、最近「哆啦A梦」へと変わった。また、スポーツ・映画・音楽などで、ある分野・団体・個人をひいきする人のことは、○○迷（ファン）と訳されていたが、最近「○○粉丝」（粉絲→fan）と新しい訳語ができたケースが見られる。

(3) 日本生まれの食べ物の中国名（例）

近年、日本食が中国でも非常に人気が高く、いろいろな日本の食べ物が中国に紹介されている。例えば、熬点（おでん）／（音訳）、章魚小丸子（たこ焼）／（意訳）、生魚片（刺身）／（意訳）などである。ちなみに章魚は「たこ」で「小丸子」は「団子」のことである。生魚片は文字通り、生魚の薄切りである。よくできた訳語だと感心した。しかし、よく考えると「刺身」の材料は必ずしも「魚」と限らず、「馬刺」も「湯葉刺」もあるので、「生魚片」でほんとうに適切なのかどうか、判断は難しい。

5．気にかかる日本語の表現

私は、日々の生活のなかでいろいろな日本語表現に接して新しいことを習うチャンスに恵まれている。しかし、時々目に付き、耳にする日本語に驚いたり、考えたりすることがある。幾つかの例を挙げよう。

(1)「飲食したくずものや空き缶はゴミ箱へ」

ある日、某駅で電車を待っている間、構内の待合室の窓ガラスに張られた上記の文言に驚いた。勿論、「くずものや空き缶はゴミ箱へ」の意味は分かる。しかし、文中の「飲食した」の部分が「くずものや空き缶」を修飾する部分であるなら、飲んだり食べたりした「くずものや空き缶」ということになる。

「（飲食した）くずものや空き缶はゴミ箱へ」

↑

即ち、「（飲んだり食べたりした）屑物や空き缶はゴミ箱へ」

↑

そんなものを食べる人はいないであろう。中国で日本語を学び、外国人の私だからこそ、感じてしまうことなのだろう。

やはり、次のように表現すべきである。

「飲食した後のくずものや空き缶はゴミ箱へ」

(2)「募金いただける方」

上記の文言は、ある募金チラシの文中に使われた文言である。これは正しい日本語表現なのか、非常に疑問に思う。

（a）まず、動詞についていろいろな種類がある。動作の方向性を示すものもある。

例えば　　方向動詞　　来る　⇔　行く
　　同様に　　募る　⇔　応じる

広辞苑によると、募金とは、寄付金をつのること。例として「街頭で募金する」「募金運動」などがある。

募集　　⇔　　応募
↑　　↑
主催側　　大衆

つまり、「募る」という主催者の動作に対し、大衆（主催者以外の人）はそれに応じる。

（b）また、「～いただく」の使い方を見てみよう

（例）ご説明いただきまして、ありがとうございます。
ご案内いただきまして、ありがとうございます。
お客様に「安心」「信頼」していただくために。

上記の用例から分かるように、基本的に「相手側の動作＋いただく」である。または「自分の動作＋させて＋いただく」である。「説明・案内・安心・信頼」は、何れも話し手側から見た相手側の動作である。同様に募金はあくまでも主催側の行為である。大衆は、それに「応じる」とか「協力する」側である。

つまり、次のように表現すべきであろう。

「募金いただける方」
↓
募金に　ご協力いただける方
（主催側）（大衆）

(3)「すごい残念です。」

皆さんは、普段こんな表現を使ったり耳にしたりしたことがなかろうか。私は非常に気になる。やはり「美しい日本語」の響きが好きである。

例えば、「すごい　びっくりした」
「すごい　いい」
「すごい　充実している」
「すごい　きれい」
「すごい　ほっとした」
「すごい　簡単だ」など

「すごい」の使い方は、上記のように多くは間違って使われている。「すごく残念です。」

6．むすび

日本と中国は、「漢字」文化を共有している。しかし、中国の人々にとって日本語の「漢字」は意外に難しい。これまで述べたことは、主に日中の「漢字」の違いや日本語表現の難しさを示したものであるが、両国の文化的相違を探るうえで一つの参考になれば幸いである。